

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	遠航の記（前々號の續）： 雜録
Author(s)	八人連
Citation	龍南會雜誌， 6 9： 2 2 - 3 1
Issue date	1898-12-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5186
Right	

迄て事蹟は暴みて地に落ち、虚偽となり疑問起り争論の種となり跡はどこに曇りて忘却と暗黒、碑名も苔に晦まされ空を仰きて建てる石塔も、砂の堆み待つ間程なくして砂に歸り、屍骸も塵土と變り行きて詮する所皆空、嗚呼永劫の墓石と紀念とを保つものは何ならん。如何なるものこれ無窮なる。思ひつづければ蕭々として夜半の嵐吹きすさび、老梟木の葉隠れに森になく、月の影青く凄まじく、死者の悲々き此荒れ場を照らさつ、廣漠として道もなき天の大原を流浪さつ前に群る黒雲に入り天地暗々枯薄獨り吾を招くのみ。

遠航の記 (前々號の續)

八 人 連

山鳥の尾の長々しき遠航記、諸君定めて御退屈に思召すらん、されば、前々號乃ち六十七號にて暫く中止を致し置き候らいしも、折角出しかゝりしもの、今更引き込むも何やら本意なく、また、諺に云ふ、下手の長たんぎな、下手でなければ長くは書けぬと、自分勝手の理屈をつけ、本號にて愈完結を致し候、回顧すれば本年一月寒中の出来事、春夏秋冬をへて冬の始めに至りて完結す八人連の内三名は、今や去つて大學にあり、一名は本年七月故ありて退校し、残れる四名は例の如く青表紙と首引中なり。然れども花晨月夕相集まる毎に、談當時の事に及ばざるなし、三百日以前の狂瀟寒氣の難、猶ほ昨日の事の如し、流氷を別たす、歳月の流るゝ豈一轉瞬のみならんや、今茲夏期余日奈久に遊び、波濤滾漫たる不知大海を望み、坐ろに當時の事を回想し、悵然たるもの之を久しうす、今更に貴重な紙上けがす所以のもの、畢竟此感に堪えざればなり、諸君請ふ之を諒せよ。

一月九日。冷かなる姿に夢を結ふ間もなく、早くも午前五時となりぬ。流石寐坊の八人連も起き上れぬ。すわ飯よ。荷物よ。と立さぬぐ内、何時の間にか衆悉く結束を終る。有志諸氏交るゝ來り訪はる。蓋し我一行を送らんとするなり。六時半宿を出づ。

戸外の寒さは昨日にかわらず。永代橋に至る間に肢体悉く凍ぬ。いさや急漕一番怨讐を破らんか

な。艇は橋下恰好の位置に繋かれ、潮水滿々と湛えて人待ち顔なり。徐ろに乗艇を終り、有志諸君の厚情を鳴謝し告別す。兩深水氏關淺山の二氏は、港口まで送らんとて乗艇せらる。鉄腕一たび鳴れば、艇は矢の如くに水俣川を下る。艇旗は朝風に飄りつゝ、漕手の赭顔と相映じ、出立の様に勇ましく雄々しけれ。岸上鯨波夫に起る。

港頭に出づれば、數日間も暴れに暴れたる不知火海は、尚ほ其名残を止めて、澎湃聲々、蛟龍の天に登らんとするが如く、大蛇の口を開きて猛れるが如し。八大龍王、此處をせんと、狂ひまわる様、さても止や、螳螂の斧、何とて我艇に敵ふべき、漕げや漕げや、日比練へし黒金の腕、斗牛をつくの膽は、今こそ用あれ、いと思ひ知らせて呉れんと、一同勇みに勇めば、額にかゝる水沫も直ちに湯氣と變じ、艇側をうつ輕々の音も、吹きまきさるはやての叫びも、あわれ仙樂と覺え、難なく大崎鼻の一角にぞ漕ぎ着けたる。

此處にしばらく艇を寄せ、岸邊に上り、落葉を集めて暖をとる、遠く望めば、米の津方位に當りて、微かに烟の上るを見る、これを今日八代沖まで我等を伴ふべき不知火汽船會社の愛國丸なる。

かくて漸く近づきて、船体ありくと思ゆるかと思ふ内に、はや水俣川を下り来る、はしげ四五艘、乗客貨物を滿載し、いとはこり顔に、我艇の側を過ぎ行く船頭のつらにくさ、かゝる間に汽船は二丁あま、あななに投錨す。すね後れては一大事と、一同艇に上るや否、へびの一令、忽ち雑々船を漕ぎ抜きて、眞一文字に本船指まで漕ぎつけたり。

船長年齡五十餘、体格肥大、顔面快活の相あり、直ちに船員を指揮し、兩深水氏と力を合せ、艇を艦に繋ぐ、於是吉田石坂の一生は艇中に止まり、他は皆乗船す、九時拔錨。

瀛船は徐々に進行を始めたり、一行は甲板上より送り來りし人々に別れを告げぬ、嗚呼諸氏と別るは恰かも百年の知己と訣するが如し、感慨何ぞ堪えん、かゝる間に船は漸次速度を早め、八ノツト以上の速度となりぬ、送る者、送らるゝ者、互に手をふり帽をふる、諸氏の乗せる小舟は、波のまにまに浮きの沈みつゝ、或は見え或は隠れて、何時しか杳として見えなくなりぬ。

上等室

抑曳船たるや、本船の困難なるは更にも云はず、曳かるゝ船の舵の取り方は、實に熟練を要するものなり、若し一たび之を誤らんか、艇は忽ち覆没せんのみ、平時已に然り、況んや今日の如き怒濤の中に於てをや、一生の困難、さこそと思ひ遣られては、安々として船室中にある心地せず、六人交るゝ艙邊に立ちて、互に氣脈をぞ通じける。

先是我一行は、水俣有志の盡力と、船長の厚意によりて上等室に入れられたり、上等室に入れたるは臍の緒切つて以來、嘗て洋行を夢みたる時と、此度にて僅かに二回、常は下等室の薄暗き處に押し込めらるゝに定まりたる者共は、今や得意の絶頂にあり、坐ら右舷に、過ぎにし古戦場を望み、高談雄辯波聲を壓せんとす、甲板を通り歩く幾多の乗客は、皆目を丸くして我室内を窺ひ見るに、忽ち鼻高の江東生は、いと高々と鼻を高めて云ひける様、見よ彼等は我等の上等室にあるを見て熊本紳士の漫遊と思へるなり、仰ぎ見て敬意を表する様の笑止さよと、咄々自惚るゝ事を止めよ、役等は、上等室には似合はぬからぬ風体と、我等をいふかりながむるにこそと、竹溪生は雷の如き聲にて笑ひぬ。

大門灣口を過ぐれば、風止み、波も亦靜かにて、四日ぶりに珍らきもうらゝける日光を見ぬ、是に於てか一行は甲板上を散歩せ、遠近の島々を指點せ、野坂の浦の勝景を眺め、目指す加賀島は、今か今か

と待ち居たり、船中にて、全校生の鹿兒島に歸省きて、今や再び熊本に出でんとする兩三子と出遇へり、諸子の言に曰く、今朝米の津より乗船せしに、波浪荒くして、はきけ覆へり、荷物多く紛失せりと、以て其如何に此日の險惡なる航海なりとやを知るべきなり、

津奈木にて、我一行のために大に周旋の勞をとり、全校生深水靜氏は、佐敷より乗船せり、思はざるに幾多の同伴を得、談話益佳境に入り、更にあたりの景色に目をふるゝ暇なし、深水氏の言に、當葦北郡長は則今氏と同時に乗船せりと、乃ち郡内至る處に於ける厚意を謝せんがため、野坂戸次の二生は、葦北郡長元山儀典氏を別室に訪へり。

先づ二生は、衆に代りて各地の歡迎を謝せ、且曰く、思はざるに過分の厚情に接し、一行の士氣爲めにふるひ、茲に恙なく歸航の途に就くを見たり、熊本に歸るの日、行て我校長は復命せば、校長必ず閣下の周旋を囑謝せらるゝならん、葦北の地は、生等嘗て之を聞けり、義に厚く、武を尚び、尤も海事思想に富むと、今來りて之を見るに、誠に此の如きものあり、是れ一に閣下啓誘の力によらすんばあらずと、氏微笑を含んで曰く、過褒敢て當らず、先に諸子遠航の報を得たれば、直ちに吏員を諸方に馳せて之を報じぬ、余は只余が職責を盡せよのみ、然るに幸なる哉、各地村民有志の熱心なる、能く余の希望を就したるは、深く満足する處なり、當郡の人士は、古しへより武骨の風を養ふ、其遺風今に至りてなほ存す、余任に此地にあるや、夙に此風の維持に力め、課業の傍ら、小學生徒に柔道擊劍游泳を奨勵せ、体力を強固ならしめ、聊か以て國家有用の材ならめんと事を期す、昨年に至りて更に端艇設備の舉あり、未だ其設計中にありと雖も、有志家の助力は不日其功を奏するに至らん、此時に至らば、之を誘導するは諸子に待たずと誰ぞと、二生曰く、葦北の地、山に良材の産あり、海に魚介の利あり、而して風俗醇厚、後來有望の地、生等は豫じめ閣下の期する處の必成するを祝せんと、乃ち辭して室に

歸る、元山郡長は、此日處用ありて大牟田に向はるゝと云ふ。

室に歸りて幾何もなく、船は早く加賀嶋沖に投錨す、乃ち船長其他全校生諸氏に別れを告げ、再び艇に上れば、愛國丸は徐々に八代方面に向て航し去りぬ。

これより先は再び我等の腕づく、不知火海を漕ぎ去りて、日頃のうらみを有明海に報ひんは、掌を指すよりも易き、いざと、櫓取り直さんとするに、時は己に〇時半となりぬ。忘れたりや、忘れたりや、空腹にては働けずと、一同艇艙に集まり、晝食をすす、之より艇艙を稱して上等室と云ふ。晝食は己に終れり、されど腹中何處やら承知仕らざるが如し、かゝる時こそと、携えたる中の一甌をつくす、龍鼻、長鯨、竹溪の猛惡漢には、嘗めたる程もなければ、中には顔面に紅を呈せしものもあり、これにて少しく面白くなりぬ、やがて各自のシートに着く、潮流の工合にや、何時の間にか艇は半瀬の近傍に流されたり、之より三ツ嶋の傍を過ぎ、藏々の瀬戸に入る、不知火海は今ど見納めなると、顧みるに、葦北の山は微かにて我と別れを惜むが如き、遙かに此山に告別せ、更に勇を鼓きて漕ぐ、右舷漕手某、スプラッシュをなすこと甚き、平素の巧妙にも似ず何たる事ぞと打ち見れば、讀めたりく、左舷の方に當りて、『カキ』を拾へるものあり、前にも述べ如く、生は大に『カキ』に執着せり、さてこそ一同大笑ひとなりぬ。

これよりは先に通りし航路、又一元語を費やさじかき、午后四時と云ふに三角に着す、上陸后直ちに冬野旅館に入り夕食を命ず、『カキ』に執着せし某々二生、茲に始めて新鮮なる好物を得て、之を食する様長鯨の百川を吸ふに異ならず、一坐之を見て打ち興する内に、何時ぞか五時となりぬ、此日は此處に一泊せんと議もありえが、時日遷延のためとは云へ、今日の半航路は瀛船に曳かれ、漕ぎえ

處は僅かに十海里、今若き此處に一泊せば、男の一分相立たず、殊に月もあり、又綠川口に達する頃は満潮なるべく、好機失ふべからず、是より直ちに乘艇し、腕のつゝかん限り川尻指して漕ぎ出でんと、の腕に斗決し、五時半三角を發す、時に夕陽溫泉岳に没せ、紅映空を染め、漣波爲めに紅に、買舟時に歸る、穩聲に緩急、夕霧の中にひきき、身已に仙境にあるの心地せらる。十一時、港を出れば波なく、宛然湖面の如くにて、又晴昔に似ず、網田の沖に來る頃、日全く暮る、思ひまゐせは五日以前、我艇が、あわや海底の礁層と化せんとせしは、此處なんめり、危うかりけり、天若し吾人を助けずば、目出度き歸航もなま得ざらんにと、槳の操柄を握りつゝむれば、面白や槳の端、磷光を放ちて燦然たり、此處にかまてに漁りせる漁舟の間を縫ひ行くに、皆驚きて云々「海軍々々」。長濱の沖を過ぐる頃、月東山の上に出で、銀波滔々、衆覺えず快と呼ぶ、是に至りて寒頓に加はり、手足凍えて操槳自由ならず。

川上り

げに浮世は面白きものなりけり、人は逆境にありとて落膽すべからざるなり、逆境は順境を得る爲に人を試みる良劑と思はざるべからず、世に厭世家と云ふものあり、此世が已れの注交通りに行かずとて、直ちに世を見限りて山林に入る、さて山林に入りたりとも、春夏秋冬のめぐりと天氣の晴雨、若しくは種々雑多の事々が注交通りに行く譯にあらず、つまり天任せとあきらむるより他に仕方なかるべし畢竟厭世家は順境を得るための階段なる逆境を通り過ぐる勇氣なきもの、之を思へばむしろ憫然たらざるを得ざるなり、夫れは偕て置き茲に八人連は、一月四日の川下り以來、海上に於ては一日とて寧日なく、暴風、暴雨、波濤、暗礁、寒氣、霜雪、は勢を合せて二六時中絶間もあらず襲ひ來

が、幾十度此世の暇を取らせられんとせしぞ、されど餘人は知らず、八人連は元來人世の難事をば永素瓦斯よりも輕きとて、何のその岩をも遷す秦の弓と云ふ金言をば、朝夕護身の靈符と心得、困難に當りて屈せずなゆまさればこそ、茲に始めて明月、上げ潮の助けを得て、いと難き川上りも安々と出来るなれ、今や寒氣のために手足の凍へたるのみにて、別に差支たる苦しみもなく、船は何時しが住吉山嘴に近づきたり、月は愈さへ渡り、遠近には、さざり立ちこめ、住吉山嘴は長く影を海中に倒寫し、何れか是れ松風ぞ、何れかこれ漣聲ぞ、境うたゝ清さを覺ゆ、『高砂や此浦船に帆をあげて月諸共に出でまほの』と謠ひ出づるもあり、あるは『うき事のは此上につもれがし限りある身の力ためさん』と歌ふもあり、あはれ憂き事にはまだ飽き足らぬにや、さても不敵の奴原なるかな、

海風は酔でもち男は氣でもつ、漕げや歌へや、歌へや漕げやと勇み勇めば、艇は是れ弦をはなれし矢の如く、難なく二里を漕ぎ上りて密柑に達す、これより航路少く複雑となりぬ、思ひ起す昨年一月の六日、花岡龍田金峯の三艇を擧りて此川を上りし時を、當時は我端艇最初の遠航にして、淺瀬にのり上げ、枝流に迷ひ、僅々十數丁の處をば數時間も狂ひまわりて、漸くに川尻に達せぬ、今回は元より己に航路を熟知す、されど艇は泥水深くして坐礁を易ければ、これより先の航路を吾人が尤も配慮せし處、されば注意に注意を加へ、漕ぐ毎に撓もて水の深淺をはかりつゝ、寛々としつゝ湖るも、なほ淺瀬にのり上げること一度、然れども幸に手足をぬらさずして浮び出でたり、十一時半川尻に着し、艇を鐵橋の土流角米屋裏に繋ぎ、三名を上陸せしめ旅宿の周旋を托し、他は艇中に接し、寒氣は益々強く襲ひ來れり、饑渴は一層に迫れり、手足は我物なるか他人の物なるかと疑ふばかりに感覺を失ひぬ、六人互に相抱いて馴ふるのみ、かくて、陸上りし三人は、先づ角米屋に

十月十日、此日は是れ我遠航最後の一日、殊に里程は僅かに三里、百戦百勝を経來りて八人連には、物の屑とも覺えず、午前八時に起き出で、直ちに學校端艇部に今日十時川尻出發の由を打電す。又もや例の天言壯語ははしまりぬ、有明不知火兩海の霸權、今や全く吾人の掌中にあり、是より更に時日を得ば、進んで長崎港に入り、若しくは黒ノ瀬戸を越えて鹿児島に航するは易々たらんのみ、

十時半川尻を發す、凡そ川尻より杉嶋橋に至る間は、流れ急にまて水淺く、下りには水勢の助くるあれば何事もなければ、之を溯らんとするときは、艇は二間毎に一膠する位なり、されば一同艇を下らず、其泥水を淺からしめ、水を涉りて之を曳くに寒さ甚しく、時に角石に足を觸るれば痛さ堪へがたき、さうでたに深淺定めなき河床、少くも注意を怠るときは、忽ち股を沒え、漕衣悉く濡ふ、杉嶋橋を越ゆれば水は再び深く、櫂聲勇ましく漕ぎ上る。竹溪に至りて滿艇飾をなす威風堂々の中ノ瀬に向ふ、日光うららかに、和風吹き、兩岸の梅樹叢を破りて芳香を放つもの、兩三枝、鶯語啼啼一聲又一聲、指を屈すれば此日はこれ一月の十日なり、遠航艇中曆日なきもの、六日

中ノ瀬に至りて携帶の一瓶を倒さ、一同勇氣百倍三時江津に入る、富田定壽氏出で、迎ふ是に増々元氣を復さ、四時艇庫に入る、嗚呼六日の間難を共にせよ大連號をすて、上陸する名殘惜しさ實にたどるに物なき

破取に至れば松崎平田永村の三氏來り迎ふ祝酒一杯喉を下れば意氣豪然歌へらく

八重の潮路をのりこえて

今日かへりくる日の本の

ますら猛男のをよきさを

語りつぎなく千代までも

とかくてど壯絶なる遠航は是に終りぬ

東鑑園主

南豊旅談餘録

東鑑園主人

東鑑園主を扇過、百花乱發す、正に是れ艶陽三月の天、恰も善玄翰林此時數日の間を得、心廣く體胖にして蓬意瀾め、動きの時、宇佐八満宮(大分縣豊前國宇佐郡宇佐町)の祭典に會し、遍く寶庫を開て、廣く衆庶の參觀を慫慂す、と傳ふるあり、蓬窓何ぞ留塾を學ばん、乃ち四月二日未明飄然程を發す朝霞氷の如く、羣斗尚ほ依稀たり、池田驛より派車を藉て行橋に至り更に豊州線に移り長州驛に下車す龍蛇輓路を蹴り驚きも疾く翠嵐八十程經盡せば僅に十時間、是より歩すること里餘にして所謂宇住驛を得たり馳せて八満宮に至る關門已に閉ざせり乃ち明旦開扉の時を期し、去て旅亭に投ずれば頗陽記に欄干の西にあり

良辰古のまゝ風雨多く陰晴朝夕を計るべからず翌蚤起天を望めば陰雲四合兩將に至ちんとて疾風之が先を爲すものゝ如法暫く他行を戒め欄に依り山に對し聊か以て仲々を慰む己にして雨霰零たり氣魂終に屈し無聊言ふべからず乃ち起て奉祝事務所を訪ひ閑談數時に亘る其中に曰く八満宮に詣り八満宮に係はる舊記古文書の數は皆収めて本宮寶庫にありと雖ども御縁記、御托宣集の二書に至れば其後絶版の姿にして坊間稀に見る處今其原本幸ひ此處に藏す就て見らる可き其他祭會式類聚官記、八満本記、盆軒等皆同官に關する記録の重なる者を爲すと